# 冬山登山靴の思い出－後編－

藤井 諭

前月号に続き、冬山登山靴と行動を共にしたＧＷ雪山登山の④以降を振り返ってみたい。

**④ 2013 年 5 月　霞沢岳、西穂独標**
**⑤ 2015 年 5 月　立山縦走、奥大日岳**
**⑥ 2018 年 4 月　鹿島槍ヶ岳、爺ケ岳**

④ 私にとって６年振りの残雪の上高地再訪で、初日は嘉門次小屋のイワナの塩焼きが美味しかった。翌日早朝から徳本峠へ登る。峠から遠かった霞沢岳からの穂高連峰の眺め（**右写真**）は、西穂・奥穂・前穂と並ぶここでしか味わえない展望だった。帰路、K1ピークの急な下りは滑り出したら止まらないため、震える程に緊張した。いつでも滑落停止できる体勢で、ピッケルを効かせて一歩一歩確実に下る。下り切った時は緊張から開放されてホッ！とした。泊まった徳本峠小屋は、ウェストンが初めて穂高連峰を眺め著書「日本アルプスの登山と探検」に記した、歴史の香りのある地点であった。

翌日は、ゆったりと静かな徳本峠から、賑やかな上高地に下って雑踏を早々に通過し、上高地温泉から西穂山荘への道に入る。このルートはトレールが無く、赤布を探しながらのルートファインディングに苦労した。積雪期にはこのルートは使われないようで、迷わないようＧＰＳが役に立った。西穂山荘の夜は寒冷前線の通過で小屋が軋むほどに荒れたが、最終日は予想通り朝から素晴らしく晴れた。締まった雪面にピッケル・アイゼンをキュッキュッ！と効かせて西穂独標へ。しばし白い世界の大展望に酔いしれた。西穂、奥穂、前穂、明神、そして雲海に浮かぶ霞沢岳、乗鞍岳、御嶽山と、これだけの役者揃いはないだろう。特に、正面にドッシリ広がる白い笠ヶ岳は素晴らしい。雪山の素晴らしさと美しさを満喫した山行だった。

⑤ 9年振りの真っ白い立山連峰だった。その入口で対面する高さ20mの雪の大谷は、何度見ても迫力があり素晴らしい。立山三山の縦走は、10年前とは逆コースで雷鳥沢を越えて別山へ。このシーズンは積雪で真砂岳への巻き道が使えず、再度別山に登り返して尾根沿いに下り直した。これで時間と体力をかなり消耗してしまった。富士の折立への登りがきつくて、雄山に立った時はクタクタだった。下山路はガスに覆われて展望なく“みくりが池温泉”

までの帰りがとても長く感じた。
　翌日、奥大日岳の山頂では食事前に脱いだアイゼンをうっかり置き忘れてしまい、引き返したらちょうど雷鳥の撮影会中だった。鶏冠が赤く、白と黒の混じった美しい雷鳥、この時の写真を“風の写真展”に出品できた事は不幸中の幸いだった。帰路、室堂乗越付近の大雪庇（**前写真**）には驚愕したが、登山ルートは十分間隔をとっており安全だった。下山路を振り返ると奥大日2511mピークの急斜面に改めて恐怖を感じた。最後に、今回の「みくりが池温泉泊」では、10年前の列車中で隣の若い女性にソッポを向かれた苦い経験を繰り返さないよう、体の臭みを念入りに流し取ってから帰路についた。

⑥　雪の鹿島槍ヶ岳は、五竜岳登頂以来8年間悩んでいたルートの解答を得たことで実現できた。その答は“爺ケ岳南尾根”、柏原新道のケルン下から爺ケ岳南峰に突き上げる。扇沢から爺ケ岳経由で、雪の鹿島槍ヶ岳に登頂できた喜びは大きい。この尾根は登山地図には無いが、雪崩や滑落の心配はなく安全である。しかし道は踏み跡程度で笹竹のヤブが点在し、予定以上に時間と体力を消耗した。結果として爺ケ岳南峰まで8時間もかかってしまい、体はクタクタになった。鹿島槍を眺めながら（**右写真**）稜線を縦走して冷池山荘へ。

　翌日、雪の鹿島槍山頂に初めて立ち、眺めた大展望には万感の思いがした。8年間の思いが叶った瞬間だった。ただし、鹿島槍をピストンして爺ケ岳南尾根を一気に下る計画はかなりの無理が伴った。この日の行動時間は12時間！扇沢でとりあえずコンパスと会長に下山報告をした。大町の宿では今までにない充実感に浸りながらも、クタクタに疲れていて泥酔した。

　ここ10年間のＧＷの山行を振り返ってみた。この冬靴のお陰で、ほぼ毎年のように日本アルプスの残雪登山を実現することができた。①～⑥の全ての山行で天気に恵まれ、計画通りに山頂に立つことができた事は、幸運であったと共にこの靴が丈夫だったお陰でもある。よく聞かれるが私がいつも単独で行くのは、自分のペースで自由に写真を撮影できるためだ。私にとって雪山は被写体として最高であり、他の季節では得られないショットを得ることができる。また山との一対一の対話も捨てがたい。これらの代償として、私のサポーターである冬山登山靴はついにダウンし、靴底も相当に磨り減って黄信号だった。10年間行動を共にした愛着のある相棒として感謝したい。

　幸い菊信の藤田氏に相談して、両足の底の取替えで復帰（**右写真**）することができた。革はまだしっかりして足に合い、底がしっかりと復旧したことで、しばらく雪山登山が続けられそう

だ。
　私も今年は古希、もういい年だと自覚しているが、やっぱり雪山の魅力は捨てがたい。しばらくこの靴には馴染みのパートナーとなってもらおう。そうそう長くは雪の日本アルプスに登り続けることはないだろう。これからは年相応に、時間の余裕を持って安全に、残雪のアルプス登山を楽しみたい。
（完）